ドイツの海岸——海辺のハイネ

冨　重　純　子*

0.

ドイツにも海はあるのだ。歴史に名高いハンザ同盟都市の船団が横切る海ではなく、人々が浜辺を散策したり、夕日と空と海を眺めたり、バカンスを過ごしたりする海が。

二〇〇九年、ユネスコはドイツのニーダーザクセン州とシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の干潟国立公園とオランダの干潟保護地域を世界遺産のリストに登録した。生態学的・生物学的な重要性とともに、比類ない、優れた美しさが登録の根拠とされた。北海の干潟はドイツで二番目の世界自然遺産であるという。ドイツ最初の世界自然遺産はメッセル採掘場跡地で、これは化石が大量に出土して、その地質学的、古生物学的重要性により、世界遺産となっているものだ。自然景観として世界遺産に指定された地域としては、北海の干潟がドイツ初の地域ということになる。

新たに世界遺産に登録された地域には、北フリースラントと東フリースラントの島々が含まれ、「干潟を体験する」をモットーに、観光客にさまざまな楽しみが提供されている。毎年、ほぼ一千万人に及ぶ休暇客がここに数日から数週間滞在するほか、三千万から四千万人が日帰りで四百キロメートル余りの海

* 福岡大学人文学部准教授

岸線のどこかを訪れている。これらの人々の多くは、ズボンの裾をたくし上げて干潮時に干潟を歩き回って砂の感触を足で感じて楽しんだり、馬車や船のツアーに参加したりする。

北海沿岸では潮流は基本的に西から東に向かうので、島々の西岸が浸食を受けることになる。東岸には砂が堆積して行く。そのようにして、もちろん島によって違いはあるが、平均して年に数メートル、島々は東へ移動しているという。

ハイネは、たびたび北海の海辺を訪れた。手近の年譜から拾ってみると、一八二三年夏にクックスハーフェンの海岸。一八二五年夏にノルダナイ島。一八二六年夏にふたたびノルダナイ島。一八二七年、イギリスからの帰りにノルダナイなどに立ち寄る。一八二九年夏、ヘルゴラント島。一八三〇年夏、ふたたびヘルゴラント島。ヨーロッパ、そしてまた十九世紀のことであるから、夏の滞在は概ねひと月からふた月に及ぶ。祖国と訣別し、パリに住んだ後も、ハイネは海辺に行っている。一八四〇年夏、フランスはノルマンディのグランヴィル。一八四一年夏、トルーヴィーユ。ハイネは二十代から激しい頭痛を初め、体調の不具合に悩まされた。海辺の滞在は直接には健康の問題による。しかし、ハイネと海の結びつきは、特別なものがあった。

ぼくはまた波に浮かんでいて、波はぼくが波のことを歌っていることを知っているので、今やぼくにすっかりやさしく波打っている。（一八二六年七月二十九日 Karl August Varnhagen 宛て）

海水の領分はぼくに向いています。（一八二六年十月十四日 Moses Moser 宛て）

わたしは自分の魂のように海を愛している。
それどころか、しきりに、海がもともと私の魂そのものであるかのように思われる。（「北海　第三部」）

――ぼくはふたたび海と仲直りしました。（君も知ってのとおり、ぼくらはうまくいっていなかったのです。）ぼくらはまた、夕方、いっしょにすわって、秘密の会話をしています。（ヘルゴラントより、一八三〇年八月一日）（『ルートヴィヒ・ベルネ』）

一八二五年と一八二六年のノルダナイ滞在が生んだ、ふたつの詩のチクルス「北海　第一部」、「北海　第二部」と散文「北海　第三部」は、「北海のお抱え詩人」としてハイネの名を知らしめることになった。海と浜辺が、人間の美的感受、享受の対象となったのは、それほど古いことではない。海水浴場が設営され、人々が海辺をめざし、あるいは水浴し、あるいは浜辺をそぞろ歩くようになるという時代の変化の先端にハイネは立っていて、北海ないしその浜辺は、ハイネによって文学的題材としての輪郭を与えられることになるのである。

1．ノルダナイの海水浴場

ゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクがドイツに海水浴場を設けることを推奨したことは、よく知られている。ゲッティンゲン大学の物理学教授であったリヒテンベルクは、海水浴の行われる様をイギリスで知り、これをドイツにも導入したいと考えたのである。リヒテンベルクは自身が編集も行っていた『ゲッティンゲン・ポケット暦』に、新しい自然科学の発見をわかりやすく伝える啓蒙的文章を長年書いたが、そこに、一七九三年に発表したのが、「なぜドイツにはまだ、大きな公共の海水浴場がないのか？」という文章だった。そ

こには、イギリスでどのように海水浴が行われているかが、詳細に記されている。

「二輪の馬車に乗り込む。板で組み立てられた小屋を載せた車である。両側に腰かけが付いている。とても広い羊飼いの馬車に似ていなくもないこの屋内は、ふたつの扉があり、ひとつは馬とその前にすわる御者の方へ、もうひとつは後ろへ向かって付いている。このような小屋は知り合いの四人から六人を、まことに居心地良く収容でき、必要とあれば動き回る余地もある。背面にはテントのようなものが取り付けられていて、張り骨入りスカートのように引き上げたり下ろしたりすることができる。海水浴場で装置と呼ばれるこの乗り物が乾いた場所に停止しているとき、このスカートは、箱の屋根の下を御者の方へ通じている綱によって、いくらか引き上げられている。後部扉のところには、地面に完全には触れず宙に浮いているが、とても丈夫な階段がある。この階段の上には、ぶらぶら下がって、地面まで届く綱が取り付けられていて、泳げないが潜りたいと思う、あるいは他の理由で怖いと感じる人々が身を支える助けになる。さて人々はこの小屋に乗り込んで、御者が海にむかって馬車を走らせる間に、衣服を脱ぐ。しかるべきところで御者はかのテントを下ろす。適切な深さを測るのに馬をものさしとすることで、御者はたいへん正しく場所を選ぶことができ、長く留まるときには、潮の満ち引きに際して先に進んだり足踏みしたりして適度な深さをつねに保っておくのである。したがって、服を脱いだ水浴客がそれから後ろの扉を開くと、りっぱな隙間のない麻のテントが見出され、床面は海で、そこへ階段が通じている。客は両手で綱を握り、下りて行く。潜りたい者は綱をしっかり握って、銃撃の際の第一列の兵士のように膝をついて倒れ、それから再び上がって、帰る途上で再び服を着る。」水底が柔らかな砂でない場合は、「階段の終点は広い四角の籠になっていて、したがって、底にまったく触れることなくそこに立つことができる」。

リヒテンベルクは北海こそ、海水浴場とするのに適当な場所が多々見出され

ると考えていたが、提言に対する最初の応答があったのは、すでに一七九三年のうちに、メックレンブルク・シュヴェリンからだった。そしてバルト海のハイリゲンダムにドイツ最初の海水浴場が開かれたのである。北海ではノルダナイ島が候補地となったが、なかなか実現にはいたらず、海水浴場としての本格的な始動は、ナポレオン率いるフランス軍による占領の期間後の一八一四年を待たなければならなかった。

ノルダナイは他の五つの島と北海沿岸部とともに、東フリースラントを構成する。東フリースラントは今日、ドイツのニーダーザクセン州に属するが、その境界は一七四四年まで存立していた東フリースラント公国と同じである。一方で南に広大な湿原を抱え、他方で住民の生活が海とのかかわりにおいて成り立っていたために、他のドイツの地域に対して、比較的孤立した地域であった。オランダとの密接なつながりもそれに寄与した。中世において「フリース人の自由」と呼ばれた自治体制を維持し、近代初期においても君主の専制を許さなかったこの地域の独特の発展はきわめて興味深いが、ここでは北海初の本格的海水浴場が開かれることになった時点に急ぐことにする。

一八一五年のウィーン会議により、プロイセンはそれまで所有していた東フリースラントを手放し、東フリースラントは新たに王国に昇格したハノーファーに属することになった。一七一四年にハノーファー選帝侯ゲオルク一世がジョージ一世としてイギリス王に即位して以来、イギリスとハノーファーは同君連合で結ばれていた。一八三七年、ヴィクトリアがイギリス女王に即位したときに同君連合は解消され、ハノーファー王となった女王の叔父エルンスト・アウグストが、イギリス的な自由主義国家体制を破棄したために、グリム兄弟らがそれに反対してゲッティンゲン七教授事件へと発展したが、それはまだ先のことである。東フリースラントを治めることになったハノーファーの王家は、イギリス風の社交界的な海水浴場を作ることに熱心で、すでに作られつつあったノルダナイの海水浴場を上流階級の集う立派なものにしようと考え

た。そして、一八一九年、ノルダナイは「ハノーファー王立海水浴場」となったのである。

2．ハイネ、ノルダナイに行く

ハイネがノルダナイに滞在したのは、一八二五年と二六年の夏である。法学を修めてゲッティンゲン大学を卒業したが、何の職に就くべきか定まらず、しかも体調も優れなくて、働くためにもまずは健康にならなければならないという、落ち着かない時期であった。ハイネは長いこと、激しい頭痛に悩まされていた。卒業に先立ってハイネは、「ヨーロッパ文化への入場券」を手に入れるためにユダヤ教からキリスト教に改宗もしている。

一八二五年、ハイネはエムデン経由でノルダナイに渡っている。当時のガイドブックによれば、たとえば一八三〇年にエムデンからノルダナイまでは帆船で八から十時間かかり、もしノルトダイヒまで陸路で進んでからなら、一から二時間で島に渡れた。通常は満潮の直後にノルトダイヒを出発し、引き潮を利用して島に向かったという。ハイネはエムデンから八時間あまり帆船に乗って、ノルダナイに到着したのだろう。八月十三日に島に到着した客のリストに「ゲッティンゲンより法学博士ハイネ」と記載が残っている。船はおよそ一メートルの水深のところに停泊し、乗客はそこで車高の高い馬車に乗り換えた。

今日では、ノルトダイヒとノルダナイ島の間をフェリーが往復していて、所要時間はおよそ一時間であるから、この区間を見るかぎり、風向きのよいときの帆船はフェリーと同じ速度で航行したということになる。もちろん風向きや天候は大きな問題で、距離が長くなればなるほど、帆船での渡航は不確かにならざるをえなかった。

ノルダナイでハイネは医師の指示に従って、毎日、数分と決められた水浴を

行った。もちろん当時は、男女の水浴の場所は厳しく隔てられていた。しかし、ハイネが記すところによれば、ノルダナイでは両性の水浴場はそれほど遠く離れてはいなくて、それに「よい望遠鏡を持っていれば、世界中どこでも、多くのものを見ることができるもの」である。

海辺はこの頃には、水浴療法の場所であるとともに、貴族や裕福な市民の社交と愉しみの場所ともなっていた。ハイネもその社交に加わったが、上流階級の人々にまじって賭けごとにも手を出し、たちまち借金を抱えることになる。

「親愛なるクリスチァン、

君がノルダナイにもう数日長くいてくれたなら！　あるいはぼくがもう少し頓馬でなかったなら！　そういうことなのです。ぼくがドイツでもっとも学識ある人間であるにしても、もっとも賢い人間でもあるとぼくの言葉で保証することはできません。君はぼくに六ルイ金貨、貸してくれなければなりません。ほんとうにとても困った状態なのです。ぼくがよりにもよって君から金をせしめようとするからといって、君は驚かないと思います。ぼくには君の記憶はあまりに新しいものだし、たとえ君が――そうであることを望みはしないが――もうぼくの最良の友ではないにしても、君はぼくの最良の友人たちの中で、ぼくがもっともたやすく金をせびることができ、完全な俗の人としてもっともたやすく数カ月、数ルイなしに暮らすことができ、生まれからして、ぼくが相手なら危険がないことを心に確信している人間だからです。この手紙は確かに届いて、君はぼくがベルリンに行くまで、つまり一月まで六ルイを貸してくれるものと思います。さもなければこの上なくほんとうにとても困った状態に陥ってしまい、四週間前、旅をしたり水浴をしたりするのに五十ルイ送ってくれたぼくの家に、その金をほとんどすべて徒に使ってしまって、やって行けなくなってしまったことを白状しなければならなくなるからで、そんな告白はぼくにとって予想もつかないほどおそろしい

事態を引き起こすでしょう。ぼくの家の事情を知っている君なら、簡単に推量できるとおりです。

郵便屋が出るところで、ぼくもうんざりしていてたくさん書くことはできません。胸にあふれるものをすべて、君にぶちまけたい気持ちが強くこみ上げてくるのですが、今日それをすることはただひとつの理由からもできなくて、それはこの手紙の本来の目的が金をせびることだからです。そしてほんとうに！君のぼくに対する気持ちは変わっていないでしょうか？　ぼくに関して言えば、ぼくの気持ちは変わらないままです。つまり、以前と変わらず、君について腹を立てています。わかっていると思いますが、あの昔ながらの欺瞞です。まったくのところ、今日こそほんとうに十分に言いたいことを爆発させ、君に非難を叩き込み、ののしりたい、君に金をせびろうと思っているからなおさらです。〈…〉

君のもっともよいところは、ぼくが君を好きで、かねてより君に金をせびるのが簡単だったということです。だから、郵便で六ルイ金貨を送ってください。」（一八二五年八月末 Christian Sethe 宛て）

このような、文章の天才を傾けた金の無心の手紙――「内心うごめく君に対する不満の数々にもかかわらず、それでも苦境にあっては、無条件の信頼をもって君を頼る」ことで、「この機会に、君に友情の最大の証を与える」（一八二五年九月一日同上宛て）と、賭けごとで作った借金の肩代わりを頼む――を、ハイネはノルダナイから数多く送っている。

ハイネの言う家の事情とはもちろん、ハイネを経済的に支えてきたハンブルクの叔父ザロモン・ハイネのことである。ハイネは叔父に依存する状態から脱したいと願っていたが、健康状態の改善が何よりも先であって、それに叔父のおかげで目下可能になっている快適な生活を捨てることはハイネにはできなかった。叔父と訣別するわけにはいかなかったのである。

叔父は「ハンブルクのロートシルト（ロスチャイルド）」として知られる、成功した銀行家で、ハイネの父はデュッセルドルフで破産した。ハイネにとって、ハンブルクの従姉妹たちは手の届かない存在だった。社会的距離は大きかった。ハイネはいつもこのような社会の境界線にいたと言うことができて、それはここノルダナイでも変わりがなかった。

一八二五年にノルダナイには一三五軒の家におよそ六五〇人の住民がいた。五十三人の家長が漁師として登録されており、他に二十一人の水夫がおり、二十九人もの寡婦が住民帳に記載されているという。「北海　第三部」のなかでハイネは、ノルダナイの貧しい人々ときらびやかな海水浴客の対照と、クラブハウスのまばゆい窓やそこの悦楽に満ちた生活が島人たちに及ぼす悪い影響、火をつけることになるだろう欲望について記している。そして、「ヨーロッパの大きな時代変遷」に言及しつつ、つづけてハイネ特有のレトリックで次のように述べるのである。「子どものころ、自分がひとかけらももらえないとわかっていて、きれいに焼き上がったケーキがいい匂いをさせて、はだかのまま運ばれていくのを見ると、いつも焼けつくようなあこがれを感じたものだ。のちになって、流行の装いで肌もあらわなきれいなご婦人がたが、ゆっくり過ぎて行くのを見ると、同じ感情がちくちく私を刺すのだった。」「ここのまずしい島人たちは、まだ子どもの状態に生きている」のであって、「もしきれいなケーキやご婦人がたの持ち主たちが、それをもう少し目立たないようにしてくれたらよいのに、と思う」。

リヒテンベルクの前出の文章には、海辺を体験することのすばらしさが次のようにつづられている。

海の波の光景、その光るさまと、夏の時期にもときどき聞かれる雷のゴロゴロ。これに比べれば、誉め称えられしライン瀑布も、盥の中の嵐にすぎない

だろう。潮の満ち引きの大いなる現象。その観察は、絶えず精神を刺激するが、疲れさせることはない。今ここで私の足を濡らしている波が、途切れることなくタヒチや中国の岸辺を洗う波とつながっていて、世界をめぐる大道を作る手助けをしているという観想。そしてこれが、われわれが住んでいる地殻の形がそれによって作られた大水であり、今や天意により、この境界に呼び戻されたのだという想念。〈…〉来て、見て、聞かねばならぬ。

ここには、一方で聖書の象徴的世界、天地創造と大洪水の物語の残像と、もう一方で成立しつつある、海をめぐる新しい態度が記録されている。十八世紀半ばにいたるまで、近代的な航海がひんぱんに行われるようになってなお、イメージの世界では古代文学や聖書から汲み取られた記憶が、大きな力をふるっていた。そこでは自然は象徴的に捉えられ、海は大洪水の残滓をとどめる底なしの淵、怪物が身を潜める非理性の場所とされる。しかし同時に、十七世紀以降、ゆっくりと、海をめぐる新しい感受性と評価の体系が醸成されつつあった。複雑な過程を経て、宗教的神話の体系は背景に退いて行き、自然は美的享受の対象、あるいは科学の対象となっていく。リヒテンベルクの文章は天地創造の結果として、神によって演出された光景として自然を眺める、自然に対する新しい態度を、そしてまた、海水と身体の接触、身体感覚に向けられる新しい注意をも窺わせる。

オシアンの流行の過程で、海は主観性の鏡に、無限なるものと永遠なるものがそこで経験される場所となった。ハイネの「北海」は、自然が宗教的イメージの強制から外れ、美的感受の対象となっていく近代の長い過程の先端に位置する。ふたつの詩のチクルスと後に付け加えられた散文の第三部とが、この過程において特に突出した位置を占めているのは、北海ないしその浜辺という題材が、美的対象として、そもそもまず構成される必要があったからである。北海には、地中海沿岸とは対照的に前提がなかった。ここには古代の記憶の風景

がないのだ。ホメロス以来の神々や神話や物語によって満たされてはおらず、文化的風景ではまったくなく、むしろ歴史をもたず時間をもたないと感じられる場所だったのである。

この海の広がり、原初のエネルギーの場所は、人間が自然の力と対峙し、崇高美と悲壮美の感情に浸る恰好の機会を与える。永遠の、時間も歴史もない光景に参与しているという印象は、直接性と真正の感覚を与え、同時に、強大な印象に相対する孤独、寄る辺なさ、無力の強い感情を呼び起こす。ハイネの「北海　第三部」の中には、この昂揚と縮小の混在の的確な記述がある。

> ひとりで夕暮れ、浜辺を歩いていると、まったく特別にふしぎな気持ちになる――背後には平らな砂丘があり、前には波打ち、測り難い海が、頭上には巨大な水晶のドームのように天があり――すると自分自身が蟻のようにとても小さい姿に感じられ、それにもかかわらず、私の魂はかくも世界を覆いつくすようにかくも広々と広がるのだ。

ハイネはノルダナイに来る前年に、『若きヴェルテルの悩み』を友人から借り、ノルダナイに来てからまた、別の友人から借りている。かの自殺者は、本の刊行以来、世界苦の感情で若い読者に絶大な影響を与えた。ハイネの手紙もヴェルテル的気分というようなものを窺わせるが、空無の広がりとしての海を前にする詩人の憂鬱は、ロマン主義者たちの熱狂とは異なる理由をももっている。

> 「クリスチァン、ぼくは今日、とても傷つきやすい気持ちで、古いことどもの話をしたい気持ちです。古い憂鬱と新しい気まぐれ、苦々しい戯れと痛みの甘さについてです。ぼくは今もって、かつての阿呆者で、外の世界と平和を結んだか結ばないかのうちに、また内なる戦いに攻め立てられるのです。

— 不機嫌な天気です。海がごうごうと鳴るのしか聞こえません — もし白い砂丘の下に葬られているならよかったのに。 — ぼくの望みはとても謙虚なものになりました。かつてはヨルダンのヤシの木の下に葬られていることを望んだものです。— — — いまいましくたくさんの別れのあいさつが、ぼくをこんなにも傷つきやすい気分にしているのです。完全に短調に。ここではすばらしい日々を過ごしました。ぼくの個人的虚栄心はうるわしい前足さんにこのうえなく優しくなでられて、ほとんど、ハイネ博士はほんとうにきわめて愛すべき人物であるという考えに陥りかかったほどです。その美しい女性を眺めるのに夢中になってしまい、ぼくがそのひとのそばにいるところで君はぼくに再会したというわけ。そのひとはしまいには、ぼくをすっかりひいきにしてくださった — そして今や旅立ってしまった。ソルムス侯爵夫人との別れも、気難しいものになってしまいました。ぼくたちはずいぶんいっしょにいて、ずいぶん楽しくからかいあったのですが。夫人はぼくをたくさん誉めてくださいました。君も知っているように、その効果は決して無駄にはならないものです。〈…〉元気で。俗の人にならないで。ぼくを思ってください — やれやれ、ぼくは感傷的になっています。

君の友人

H. ハイネ」

（一八二五年九月一日 Christian Sethe 宛て）

ヨルダンに葬られるという望みを諦めたというのは、ハイネのキリスト教への改宗という事情を指し示す。みずからの出自との絆を失い、あてどなく海を前にしていることへの自嘲は、「決して洗い落とすことのできないユダヤ人」性の認識の上にある。

「ぼくはまた、北海を漂っています。海水の領分はぼくに向いています。小

舟が波にあっちへ、こっちへ、ボールのように投げられると、気分がよく、軽くなります。溺れ死ぬことは慰めになる考えで、あの残酷なヘリオポリスの司祭が残してくれた唯一の慰めです――水底に梁を渡しておかないでくれたわけですから。永遠のユダヤ人の神話は、どれほど深い根をもっていることでしょう！〈…〉われわれ、このお話の主人公であるわれわれ自身にもわかりません。白い鬚の縁を時代が若返らせて黒くしましたが、その鬚を剃ってしまうことができる床屋はいません。」（一八二六年十月十四日 Moses Moser 宛て）

ハイネは洗礼のすでに数ヵ月後に、改宗を後悔していたと思われる。詩人としての成功にもかかわらず、社交の世界で愛顧を受けはしても、改宗は何の役にも立たず、職業上の未来、社会的未来は閉ざされていることをハイネは感じていた。

3．海の詩

海はすでに、チクルス「帰郷」の中に登場している。一八二三年のクックスハーフェン訪問を機に書かれたものだ。たとえば、一連の恋の物語として読める、「帰郷」のⅦからXⅣの短詩のひとつ。

Ⅸ
月は上り
波を照らし出す。
恋人を抱けば
私たちの胸はいっぱいになる

愛しい人の腕に抱かれて
浜辺でしずかにふたりだけ。
なぜ風の鳴る音に耳をすましているの
なぜ白い手が震えているの

「風の鳴る音ではありません
あれは人魚の歌
あれはむかし海にのまれた
姉さんたちの歌」

あるいは、次のような詩。

X
風がズボンをはくぞ、
真っ白の水のズボンだ！
風が思いっきり、波を打つ、
波はわめく、がなる、狂う。

暗い高みから、激しい力で
雨粒が降り注ぐ。
太古の夜が太古の海を
溺れさせようとするかのよう。

帆柱にはカモメがしがみついて
嗄れた声で甲高く、叫ぶ。
羽ばたいて、ひどくおびえて

不吉な予言をするつもりか。

ハイネは一八二三年にクックスハーフェンからやはり北海の島であるヘルゴラントに向かおうとして、嵐に合い、さんざんな目に遭って引き返している。これがハイネと海の最初の出会いだった。もっとも、ハイネにとって嵐はむしろ、さまざまな鬱屈から解放するものであったようだ。この嵐の経験についてもハイネは、「だが、風の中にすでに最後の審判のラッパが鳴り響くのが聞こえ、波間にアブラハムのふところが大きく開かれるのを見たにもかかわらず、ぼくはハンブルクのユダヤなまりの御殿方御婦人方の巷間にいるより、ずっと気分がよかったのです。」（一八二三年八月二十三日 Moses　Moser 宛て）と書き送っている。海はハイネの心をすっかり捉えてしまった。

「帰郷」の詩が伝統的詩法に基づき、巧みな押韻の四行一節の詩形で書かれているのに対し、「北海」においてハイネは自由律を採った。詩の新しさ、独自性が読者にとっては、躓きとなることをハイネは予想している。

「読者〈…〉が北海の情景を美しいと感じるかどうかは、きわめて疑わしいと思われます。われわれの普通の淡水性読者は、通例でない揺れる韻律だけでも、いくらか船酔いするかもしれません。旧来の実直な平坦な道、詩の街道の旧来の轍を進むものは何もありません。」（一八二六年五月二十六日 Karl Simrock 宛て）

ハイネの「北海」の詩は、落日や荒々しい嵐の情景、もの思いや答えのない問いの陰鬱な感情から、沈んだ都市や失われた恋人についてメルヒェン風の物語や、夢見たり嘆いたりする北海の詩人についてのアイロニーを含んだ物語、それから古代の海の神々の、生涯と愛についての物語などに亘り、ハイネ以前のすべて、古代からロマン主義に至るすべてを結び合わせる。対立する古代と

近代の信仰、思想的問題、ユダヤ人とキリスト教、詩人が感じ、見ている波打つ海、永遠と物語——これらすべてが現在の状況を成すのであり、ハイネはあらゆる言語的手段を用いて、歴史的な現在のなかにある感受性に発言させるのだ。

海のまぼろし

だがわたしは船縁に寝ころんで
夢見る眼で鏡のように澄んだ水を
のぞきこんだ
深く、深くのぞきこんだ——
海底深く
最初は霧のようのようなものが
だんだん色がはっきりして
教会のドームや塔が見えてきた
それからついに、お日様のようにくっきり、ひとつの町全体が。
いにしえのオランダのようで
人々がにぎやかに行き交う町が。
考え深げな男たちが黒いコートに身を包み
白い襟と長い顔をして
人が蠢く広場を横切って
高い階の役場へ歩む。
そこには皇帝の石像が笏と剣で
見張っている。
〈…〉

遠い響きに秘密めいたおののきが
わたし自身をとらえる。
無限の憧れ、深い憂鬱が
わたしの心に
まだなおりきっていない心にしのび寄る。
まるでその傷が愛しいくちびるに
口づけられて開き
ふたたび血がしたたるかのよう。
熱い赤いしずくが
長くゆっくり、深い海の都の
あそこの下の古家に
おちて行き
そこにはもの思い、ひとりで
ひとりの娘が下の方の窓辺にすわっている。
腕に頭をのせ
あわれな忘れられた子どものように――
わたしはおまえを、あわれな忘れられた子どもを知っているよ！

こんなに深く、こんなに深く
おまえはわたしから隠れていたのだね
子どもらしい気まぐれで。
それでもう上がってくることができなくなって
それで見知らぬひとたちの間に知られずに
五百年ものあいだ、いたのだね。
そのあいだ、わたしは魂を痛みでいっぱいにして
地上をくまなく探していたのだ。

とこしえにいとしいおまえ
とうに見失ったおまえ
ついに見つけたおまえ——
おまえを見つけた　ふたたび
愛らしい顔を見ている
かしこい、まことの目
いとしいほほえみ——
もう決しておまえから離れないよ
おまえのところへ下りて行くよ
腕を広げて
おまえの胸に飛びこむよ——

だが今やというそのとき
船長がわたしの足をつかみ
わたしを船縁から引き離し
怒ったように笑って叫んだ。
先生、気でもふれたんですかい？

この詩の最後の連は、ロマンチックな心情から醒めた現実への反転という、ハイネ調の典型として有名である。このようなハイネのイロニーは、十九世紀の読者をしばしば憤慨させた。しかし、ハイネの特質は暴露や興醒めさせることにはない。まぼろしはまぼろしである。失われた夢、それが無傷の子ども時代であれ、来たるべき王国であれ、せわしない都市生活に対立するアルカディアであれ、そのようなものは見る者のまなざしの中にしかない。その認識がここには書き込まれているが、同時に、そのようなものへの憧れは十分に重く受け止められて、表現を与えられている。ハイネの詩は、夢想と現実、夢想の中に

現れる深い真実と日常を、一幅の絵、ひとつの物語の中に書き込むことで、両者を生きさせるのである。

『新詩集』（一八四四年）に収められることになるチクルス「さまざまのすがた」の中の「セラフィーネ」も、海辺の詩である。これは韻を踏んだ四行詩節という一八二三年の「帰郷」のような形式をもち、そこでは「帰郷」に見られたような海辺の恋物語や、「北海　第三部」の晴れやかで皮肉な調子が次々に展開していくが、異なった思想的次元が加わっている。「巌の上に」「第三の新しい聖書の教会」を「建てよう」と歌われるのである。これは、一八三三年の『サロン第一巻』の政治的情熱に満たされた序文に現れる海に連なるものだろう。

夜遅くまで、海辺に立って泣いていた。〈…〉私も水の中の声を聞いたが、あまり慰めるようではなくて、むしろ揺り起こすよう、命じるようで、しかし深く賢いのだった。なぜなら、海はすべてを知っていて、星々は夜、天のもっとも奥に隠された秘密を海に打ち明け、その深みには、おとぎ話のように沈んでしまったいくつもの王国とともに、とっくに消え失せてしまった大地の言い伝えが横たわり、あらゆる岸辺で海は千もの好奇心に満ちた波の耳をそばだたせていて、流れ込む川たちは、もっとも遠い内陸の地で聞き知った、あるいは小さな川や山の湧水からさえ聴き取った知らせを運んでくるからだ――だがしかし、もし海がある者にその秘密を明かし、その者の心に、大いなる世界解放の言葉をささやくなら、さらばだ、平穏よ！　さらばだ、静かな夢よ！　さらばだ、私がすでに、かくもうるわしく書き始め、今やもうすぐには書き続けることが困難になった短編と喜劇よ！

4．ハイネは泳いだのだろうか？

一八二六年夏ハイネは、「ぼくは水泳を練習しています。」と手紙に書いている。（一八二六年八月二十八日 Frierich　Meckel 宛て）ハイネはどのようにして、水泳を学んだのだろうか。当時のノルダナイの人々は、ほとんど泳げなかった。水浴客に仕える使用人たちも、まず泳げなかった。漁師はまったく泳げなかった。嵐の際、船縁から海に落ちたなら、泳げるということは不必要に死の苦しみを長引かせるだけだと海の男たちは考えていたという。ハイネはだれに水泳を習ったのか。

十八世紀、十九世紀ヨーロッパにおける「海辺」をめぐる欲望の変化に関する大部の研究の出発点として、コルバンは次のような疑問を記している。古代ローマ人たちは海のほとりに逗留し、海辺を散歩したり、小舟で海の上を遊覧したりすることを好んでいた。しかし海水浴だけはほとんどやった形跡がない。それから西欧の人間は、およそ千年ものあいだ、浜辺に足を踏み入れるのをやめていた。そののちになぜ、西欧の人間たちは改めて、浜辺に魅惑を感じ始めたのか。コルバンによれば、十八世紀の後半を費やして、まさしく身体と海水が接触する愉悦のために、海岸が時好となって西欧に伝播していく。ハイネを海辺に導いたのも、保養のための海水浴、身体を海水に浸すことだった。ハイネはしかも、水泳もしていた。

ハイネはその詩において、主観を映し出すものとして、歴史的社会と対立する原初的なものの住処として、古の言い伝えの舞台として、恋物語の背景として、ロマン主義的憧れと皮肉な屈折を存分に生きさせる場所として、海を歌った。しかし、その海は、海水浴や水泳の場所ではない。その領分をハイネは詩に取り入れなかったように思われる。それがハイネの嗜好によるものなのか、文学的伝統のゆえなのか、あるいは別の理由があるのか。

いずれにせよ、今日でも北海の浜辺に行けば、びっくりするような冷たさの海水に入って行く人々の姿を見ることができる。ドイツにも海辺があって、その海辺は「浜辺を散策したり、夕日と空と海を眺めたり」する海辺であるいう冒頭のことばは、訂正しなければなるまい。散策では済まないのがドイツであるようだ。海に入り、冷たい水に浸り、健康を増進しなければ、ドイツ風に海を楽しんだとは言えないらしい。

参考文献

Heinrich Heine : Sämtliche Schriften. Hg. von Klaus Briegleb. 6Bde. München（Hanser）1968－76.

Heinrich Heine : Werke, Briefwechsel, Lebenszeugnisse. Säkularausgabe. Hg. von den Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar und dem Centre National de la Recherche Scientifique in Paris. 27Bde. Berlin/Paris（Akademie Verlag u. Editions du CNRS）, 1970ff.

ハイネ『歌の本（下）』（井上正蔵訳）岩波書店、改訳版一九七二年

Michael Fleischer : Heinrich Heine. Dichter der Nordsee. Norderney（M. Fleischer）2001.

George-Arthur Goldschmidt : Heinrich Heine und die deutsche Sprache. In : Volker Michael Strocka（Hg.）: Die Deutschen und ihre Sprache. Bremen（Hempen）2000, S. 69－94.

Gerhard Höhn : Heine-Handbuch. Stuttgart/Weimar（J.B.Metzler）^{3}2004（1. Aufl. 1987）.

Bernd Kortländer : Heinrich Heine. Stuttgart（Reclam）2003.

Bernd Kortländer : Die Erfindung des Meeres aus dem Geist der Poesie. Heines Natur. In : Joseph A. Kruse（Hg.）: „Ich Narr des Glücks". Heinrich Heine 1797－1856. Stuttgart u.a.（J.B. Metzler）1997, S. 261－269.

Georg Christoph Lichtenberg : Warum hat Deutschland noch kein großes, öffentliches Seebad? (1793) In : Georg Christoph Lichtenberg Schriften und Briefe, Band III – Aufsätze gelehrten und gemeinnützigen Inhalts. Hg. von Wolfgang Promies. München (Hanser) 1972.
アラン・コルバン『浜辺の誕生』(福井和美訳) 藤原書店、一九九二年

Kleiner Führer durch das Bademuseum auf Norderney. Museum Nordseeheilbad Norderney e.V. 2013.
GESCHICHTE DER LANDSCHAFT – Ostfriesische Landschaft. 二〇一三年九月十日閲覧。http : //www.ostfriesischelandschaft.de/93. html
Deutschland Online : 世界自然遺産　北海の干潟　二〇一三年九月十日閲覧。
http : //test.magazin-deutschland.de/jp/leben/reiseland-deutschland/artikelansicht/article/weltnaturerbe-wattenmeer.html